

# 灰色の姉と桃色の妹

小川未明

青空文庫



あるところに、性質せいしつの異ちがった姉きょうだい妹まいがありました。同じ母おなの腹はらから産うまれたとは、どうしても考かんがえることができなかつたほどであります。

妹いもうとは、つねに桃もも色いろの着物きものをきていました。きわめて快活かいかつな性質せいしつでありますが、姉あねは灰はい色いろの着物きものをきて、きわめて沈しずんだ口数くちかずの少すくない性質せいしつでありました。

ふたりふたりは、ともに家うちを出でますけれど、すぐ門前もんぜんから右みぎと左ひだりに分わかかれてしまいます。そして、いつもいつしよにしていることはありませんでした。妹いもうとは、広ひろ々びろとした、日ひのよく当あたる野原のほらにいきました。そこには、みつばちや、ちようや、小鳥ことりなどが、彼女かのじよの

くるのを待つていっているように、楽しく花の上を舞ったり、空を駆けていい声でなっていました。

いろいろな色に咲く花までが、彼女の姿を見ると、いつそう鮮やかに輝いて見えるのでありました。

妹は、柔らかな草の上に腰を下ろしました。そして、しばらくうつとりとして、身の周囲に咲いている花や、ちようにじつと見入っていました。が、しまいには、自分もなにかの唄を口ずさむのでありました。その唄はなんのうたであるか知らなかったけれど、きいていると楽しくうきたつうちにも、どこか悲しいところがこもっていました。

妹は、唄にもあきてくると、懐から、紅い糸巻きを出して、そ

の糸いとを解といて、銀ぎんの棒ぼうで編あみはじめはじめていました。銀ぎんの棒ぼうは日ひの光ひかりにきらきらとひらめきました。紅あかい糸いとは、解とけては、緑みどりの草くさの上うへにかかつていました。

姉あねは、妹いもうととわかわかひときたきた北ほうの方あるへ歩いていきました。そこは、

一段低だんひくくがけとなつています。がけの下したにはさびしい空あき地ちがあ

つて、そこには、二、三本ほんの憂鬱ゆううつな常磐木ときわぎが空そらにそびえていま

した。そして、その黒くろずんだ木立こたちの間に混まじつて、なんの木きか知し

らないけれど、真まつ白しろな花はなが咲さいていました。

その白しろい花はなの色いろは、ほかの色いろとちがつて、冷つめたく、雪ゆきのよう

見みえたのであります。姉あねは、がけを降おりていきました。危あやうげな

路みちが、がけにはついていたのであります。

その空き地には、冬が残っていました。日の光すらさすのを避けて、いるように、寒い風が、黒ずんだ常磐木の枝をゆすつています。姉は、白い花の咲いた木の下にたたずんでいました。そこには、なく鳥の声もきこえなければ、また飛びまわっているちようすが見えませんでした。あたりは、しんとしている。姉は、なにを思い、なにを考えているのか、身動きすらせず、黙って白い花の咲く木の下にたたずんでいました。

姉は、ずっと脊が高かった。そして、黒い髪が、長く肩頭から垂れていました。彼女は、指先でその髪をいじっていました。その黒い髪は、つやつやしなかつたけれど、なんとなく黒いへびのからんだように、気味悪く見られたのであります。

陰気な姉は、少時は妹のことを忘れることができなかつた。たとえ氣質は異つていても、そして、こうしているところすら、別々であつても、妹のことを忘れることができなかつた。それは、快活な妹にとつては、迷惑にこそ思われるが、すこしもありがたくないばかりでなく、できるものなら永久に、姉から別れてしまいたいと思つたこともあります。

「おまえは、まだ年がいかない、いつかは私のいつたことがわかれるときがある。」と、姉は、かつて妹に向かつていつたことがあります。

「姉さん、どうか私を自由にさしてください。私は、姉さんについていられるのが苦しくてなりません。」と、妹がいました。

すると、姉は、さびしそうな顔をして、沈んで、すきとおるような声でいった。

「いつ、私は、おまえをそんなに束縛をしましたか。おまえは、どこへなりとかつてにいくがいい。けれど、おまえはしまいには私のところへ帰ってこなければならぬ。」と、姉はいいました。

「姉さん、なぜ私は、あなたのもとへ帰ってこなければならぬのですか。私は、それがわからないのです。私は、かつてなところへいきます。そして、もうけっして、あなたのもとへ帰ってはきません。あなたは私とは、まったく性質が合わないじゃありませんか。」と、妹は答えた。

「いえ、それはなりません。たとえば、おまえがどこへいっても、

わたしは、おまえを探し出します。隠れても、逃げても、それはだめです。私はおまえがどこにいるか、じきに探し出すことができます。―と、姉がいった。

なんという執念深い姉だろうと、妹は、そのとき慄えあがらずにはいられませんでした。

生まれつき快活な妹も、姉のあることを思ったときには、唄うこともいつか曇らざるを得なかったのである。

姉は白い花の咲く木の下で、なにか深く、耳を澄まして考えていました。そのとき、妹は、そんなこととは知らずに、熱心に銀の棒を動かしていた。

ひろの  
広野を越えてかなたには、町がありました。

そつちからは、たえずにぎやかな物音が、かすかに空を流れてきこえてきました。

妹は、それに耳を傾けていたが、立ち上がりました。そして、野原を歩いて、その音のきこえる方へ歩いていました。

そのとき、がけの下の、白い花の咲く木の下にたたずんでいた姉は、空を仰いで、

「妹は、町へいった。」といいました。

姉は白い花の咲く木の下から離れて、自分も町の方へ歩いていききました。

妹は、どこへいったか、その姿は見えませんでした。今度ばかりは、姉から永久に別れて、もう家には、けっして帰ってき

まいと思つたのでしよう。それで、姉あねに氣きづかれないように姿すがたを  
 隠かくしてしまつたのです。

町まちはにぎやかでした。美うつくしい、そして快かいかつ活いもうとな妹いもうとは、だれから  
 でも喜よろこばれたにちがいありません。人ひと々びとは、みんな妹いもうとを歡かん迎げい  
 したにちがいありません。

これに反はんして、陰いん氣きな、さびしい姉あねは、またけつしてだれから  
 も愛あいされなかつたにちがいない。姉あねは独ひとり町まちの中なかをさまよつて、  
 妹いもうとのいる場所ばしょを探さがしていました。

広ひろい、往おう來らいの四よつ角かどのところはなやに花屋はなやがありました。温おん室しつの  
 中なかには、外がい國こくの草花くさばなが、咲さき乱みだれていました。また、店頭てんとう  
 のガラス戸どの内側うちがわには、紅あか・青あお・白しろ・紫むらさきのいろいろうの花はなが、い

い香こうき氣きはなを放はなつていました。その店みせの前まえにいくと、姉あねは内うち側がわをのぞきました。花はなを大だい好すきな妹いもうとは、こここゝに立たち寄よつたにちがいがなおもいと思おもつたからであります。

けれどそのときは、内ない部ぶはしんとして人ひと影かげがなかつた。ちよちようどそこへ、五ご、六ろく人にんの子こ供どもらがやつてきて、ガラス戸どの内うち側がわをのぞいていました。路みちの上うへには、黄きいろ色いろなちりほこりが、かすかな風かぜにたつていました。

姉あねはその子こ供どもらをながめていました。その中なかに一ひとり人り、かわいらしい男おとこの子こがこありました。黙だまつて、真ま紅つかに咲さき誇ほこつたぼたんはなの花はなを見みていました。姉あねは、なんと思おもつたか、足あし音おとのししないよように静しずかに、その子こ供どものそそばばに近ちかづづきました。そして、氷こおりのよように冷ひ

やかな唇くちびるで、子供こどものりんごのようなほおに接吻せつぶんしました。ほか

の子供こどもらは、そのことには氣きづかなかつた。すると、たちまちそ

の子供こどもの顔色かおいろは眞まつ青さおに変わかつてきました。

「氣分きぶんが悪わるくなつた。」といつて、子供こどもは、みんなに別わかれて家いえに

歸かえつて、そのまま倒たおれてしまつた。

姉あねは、独ひとり心こころの中うちで微笑ほほえんで、町まちを静しずかに歩あるいて去さりました。

そこには、大おおきな呉服屋ごふくやがありました。出でたり、入はいつたりする

人々ひとびとで、その門かどは、黒山くろやまのようにぎわつていました。姉あねは、

多おほくの人々ひとびとの間あいだに交まじつて、妹いもうとは、その中なかにいないかと探さがした

のであります。派手はで好きずな、そしてかういふところを好このむ妹いもうとは、

きつとここに立たち寄よつたにちがいないと思おもつたからであります。

妹は、もはや、ここからほかに去つた後であつたか、その姿は見えなかつたが、ちようど若い、美しい女が反物を買つて、それを抱えて喜びながら出てきたところでした。

姉は、なんと思つたか、その女のそばに近づいて、瞳の中をのぞきました。すると、長い黒髪が女の肩にかかりました。いままで、いきいきとしてうれしそうであつた女は、急にしおれてしまいました。そして、顔から血の気が失せて、病氣にかかつたように、人にたすけられかたへ連れていかれました。

このとき、姉は、残忍な笑いを顔にうかべました。そして、勝利者のごとく、どこかへ去つてしまいました。

その日の晩方、姉は、妹を探して、あるカフェーの前にきか

かりました。その中では、若い女や、男が、はしゃいで愉快そうに唄をうたい、ビールや、西洋の酒を飲んでいました。姉は、こういうところを好きな妹は、きつとこの中なかにいるだろうと思つたのです。姉は、ガラス戸どにぴったりと顔かおをつけて、光る目つきひかめで中なかをのぞいていました。

そのとき、往來おうらいで、おじいさんが急病きゆうびょうにかかつて苦しんでいた。通りかかった人々ひとびとが、そのまわりに集あつまって、わいわいといっていました。姉は、心こころの中なかで、もうすこし妹を自由いもうとじゆうにさせておいてやろう。せめて今夜こんやだけは、かつてなまねをさしておいて、明日あしたは、そのかわり、身動みうごきのならないように束縛そくばくをしてやろうと思おもいながら、カフェーの前まえを離はなれたところところです。

こつちにきかかった姉は、苦しんでいるおじいさんを見ました。  
 姉はさつそく、そのおじいさんに近づいて、白い手で脊中をなで  
 てやりました。すると、おじいさんは、静かになつて、永久  
 に安らかに眠つてしまつたのです。

不思議な姉は、町の中を通つて、いつしか、寂しい路を、北の  
 方に向かつて歩いていました。夜になつて、空には星が瞬いてい  
 ます。通りかかる人々は、姉の目の色が光るのを見て、思わず  
 なんと考えてか、近寄ると急に水を浴びたように身震いをしまし  
 た。姉の通るところには冬のような風が吹いたのです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「愛国婦人 470号」

1921（大正10）年6月

※表題は底本では、「灰色《はいいろ》の姉《あね》と桃色《もいろ》の妹《いもうと》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 灰色の姉と桃色の妹

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>